

コミュニケーション論再考 Ⅲ -「時事英語」4年間の授業実践を踏まえて-

中村 義実

はじめに

拙稿「コミュニケーション論再考」(2000年、以下「再考Ⅰ」と記す)¹⁾、及び「コミュニケーション論再考Ⅱ」(2001年、以下「再考Ⅱ」と記す)²⁾において、私は、実践的な技術養成に多くの関心が注がれる傾きのある今日の英語コミュニケーション教育の流れに一石を投じた。その際の援用理論として、「再考Ⅰ」においては、南山短期大学教授・近江誠氏の「言語パロール説」に基づくコミュニケーション論、および慶応義塾大学教授・田中茂範、深谷昌弘両氏の「コトバの意味づけ論」を用いた。また「再考Ⅱ」においては、今世紀はじめに活躍したアメリカの哲学者、社会心理学者であるG・H・ミードの「社会的自我論」を用いた。

これらの三つの理論すべては、コミュニケーションを営む主体と客体が「相互に影響しあう」という、人間が人間でなければなしえないコミュニケーションのメカニズムに焦点を当てている点で共通する。これらの理論に登場する「コミュニケーション」という用語は、言うまでもなく、動物や機械のコミュニケーションではなく、人間のコミュニケーションを指す。それは、端的に言えば、「主体性」があり、「社会性」があり、「創造性」があるプロセスである。今日、何かと取り沙汰されることの多い英語コミュニケーション教育が、今後、本質的な発展を遂げるための礎は、まさにこのプロセスへの眼差しにあると考える。

私は、常日頃からこの眼差しに意識を注ぎながら授業実践を積み重ねてきた。本稿で試みる考察は、勤務する大学にて私が4年に渡って担当してきた「時事英語」の授業実践を土台とする。上述の理論が授業の中でいかにして具現化されうるか。そして、その具現化が英語コミュニケーション教育にいかなる効果をもたらしうるのか。最初の項で、じかにやってきた「時事英語」の授業をできる限り具体的に、包括的、客観的に記述する。その後で、上記の3理論のそれぞれを再び援用して、あるべき英語コミュニケーション教育に向けての考察を展開していく。本稿が「人間の顔をした」コミュニケーション教育に至る一つの道筋を提供できれば幸いである。

1) 「時事英語」の概要

<クラスの特徴>

敬和学園大学は、人文学部1学部のみが設置されている小規模な単科大学で、英語英米文学科と国際文化学科の2学科（定員各学科100名）に分かれている。「時事英語」は、前後期からなる通年科目で、英語英米文学科3、4年生を対象とする専門選択科目に位置づけられている³⁾。この科目を最初に受け持ったのは私が本学に赴任した1998年度であり、それ以降毎年度担当し、今年度（2001年度）で4年目を数える。

クラス登録者数は、過去3年、76名、127名、105名と推移した。また、その間の単位取得者数は、68名、114名、90名と推移した。それぞれの年度の「単位取得率（単位取得者数÷登録者数）」を計算すると、順に90%、90%、86%という数字が出る。ちなみに今年度は、77名の登録者があり、そのうちの72名（94%）が前期末試験を受け、現時点（2001年11月）で単位取得の可能性を残している。

ここで大切なのは、それらの数字の大小だけではない。この授業は、その比較的大きなクラスサイズの中にいわゆる英語力の高い学生と低い学生が歴然と同居している、という事実に着目しておきたい。この授業は、受講したい学生を誰でも受け入れる方針を取る。過去2年間（1999年度、2000年度）の英語英米文学科の卒業生数は計236名であるが、うち189名（80%）が「時事英語」に登録をし、うち172名（91%）が単位を取得した⁴⁾。現4年生については、現時点で全108名の在籍者のうち、昨年度は80名、今年度は11名と計91名（84%）の登録があった⁵⁾。ちなみに昨年度はその80名のうち、72名（90%）が単位を取得した。

すなわち、この科目は選択科目でありながら、過去3年に渡り、英語英米文学科所属の約8割の学生が受講し、そのうちの約9割が単位を取得してきた実績がある。クラスサイズの大きさに加えて、学力格差の大きさという、一見ハンディキャップとみなされる要素が存在するのは明らかである。しかしながら、実際のところ、私はそれらの要素が授業を行なっていく上での障壁になっていると感じたことはほとんどない。いかにそれらの要素を克服しうるかを明確にすることが本稿の重要な論点の一つでもある。

＜受講学生の反応＞

年度の最終授業時に学内の全講義において実施される「学生による授業評価アンケート」の過去3年分の記録〔資料1(巻末)〕を見ると、学生自身が自らの「授業態度」を申告する各項目のスコアは、必ずしも高い数字が現れていない。特に、「予習への取り組み」、「復習への取り組み」、「理解への努力」の項目は、すべてにおいて学内全講義の平均値と同じかそれを下回る数値が出ている。この点については、「時事英語」のウィークポイントであり、今後の課題として受けとめなくてはならない。

しかし他方において、私は、じかに授業で学生と向き合いながら、また学生の提出課題に目を通して、彼らの高い真剣度を感じ取れている。主観的な描写は極力避けるつもりだが、ほぼ全体の学生が真剣な目つきで授業に集中しており、また提出課題を見ても力作が多い、と常々感じてきた。

先述のアンケートで学生が「授業内容」について評価した結果を見ると、過去3年分のほぼすべての項目について学内全講義の平均値以上の数値が記録されている。特に「創意工夫」、「興味と刺激」の項目は3年間に渡って比較的高い数値が示されている。学生の反応については、この後も種々の客観的データを提供していく。

＜授業プロセス＞

「時事英語」の授業プロセスは、私が担当を開始した当初から今日に至るまでに、根幹となる部分は不動である。それは、簡単に言えば、私自身が教材を選び、それを学生に読ませ、内容を把握させ、その内容について考えさせ、さらにその考えを表現させる、というプロセスである。そのプロセスをより機能的、実質的にしていくために、私は幾度かの試行錯誤を繰り返し、ここに紹介する方式を今日ほぼ定着させている。

最初に来るプロセスは教材の選択である。教材選択に際しての具体的方針は後述するが、このプロセスは「時事英語」の生命とも言うべき重要性があることを前もって強調しておく。ほぼすべての教材は、英字新聞ならびに英文雑誌の記事の中から選り抜かれ、そのままコピーして使用される。〔資料2〕は、2001年度前期授業、ならびに2000年度に遡って、私が選択したほぼ全記事のトピック、およびその出典の一覧である。記事の量は、通例、A4またはB4サイズの

用紙1枚から2枚に収まる。

教材記事の選択に前後して行なわれるのは、「設問プリント」の作成である。学生の予習用として、またスムーズな授業進行のための一助として、記事の内容に関する問いを作成する。通常7、8題の日本語による記述式問題である。後で詳述するが、この設問プリントの存在もまた、この「時事英語」の授業において、極めて重要な役割を果たす。〔資料3〕は、2001年度前期教材についての設問プリントの問いの一覧である。

教材については、一回の授業につき一記事をメインとして扱うのが通常の方針であるが、複数のサブの記事を用意することもある。記事プリントならびに設問プリントの両方を学生に配布するのは、一週間前の授業時である。この時すでに、設問プリントの問いに答える担当者がボランティア方式で決定される。一題につき一名の解答志願者を挙手により募っていく。志願した回数を評価に加味することにしてあり、これまでの経験では、ほぼ適切な数の志願者が毎回現れている。もちろん、毎回のよう志願する学生もいれば、年度を通して一度も志願しない学生も多数いる。ちなみに、2001年度前期授業の志願者を調べたところ、計17名の異なる志願者があり、一人については計5回の志願回数が最高であった。

問題担当者は、翌週、授業開始の直前に、準備した自分の答案を板書する。その後の私の授業は比較的単純である。ほぼ記事の全文を日本語でわかりやすく解釈しながら、記事内容をできる限り正確に把握していくことが主たる作業である。その際に、受講生が黒板に板書した設問プリントの答案についてコメントし、それらを口頭により手直ししていく。

記事の英語レベルは概して高いものがあり、学生が太刀打ちできない設問も少なくない。全般的な外れな答案が板書されていることも頻繁にある。しかし、私は挑戦してくれた学生に敬意を払い、いかなる答案であれ、本人がなぜポイントを押さえられなかったかがよく分かるように丁寧な解説を加えることにしている。内容把握を終えた後は時間の許す限り、トピックに関する私なりの内容解説を付け加え、学生の問題意識の活性化を図る。

最後のプロセスは、記事内容をふまえた上でのエッセイを課すことである。後述するが、この「課題エッセイ」の主たるねらいは、学生に深い思考を促すことにある。それゆえに、問いの内容にも深

さが求められる。〔資料4〕は、2001年度前期授業のそれぞれの教材について課されたエッセイのタイトル一覧である。エッセイの形式は、自分の考えを400～600字程度の日本語で書いた上で、その内容を半分くらいの英語に要約させるという形式をとる。学生は、これらの課題エッセイを定期的に提出することになる。

ここに紹介したプロセスにあてはまらない授業も、私は時として取り入れている。例えば、英字新聞の読み方についてのテクニカルな指導や、テレビやラジオの英語ニュースを利用した指導などがそれにあたる。これらの授業法は、この「時事英語」においては、あくまでも支流として捉えられるものであり、この先、本稿では敢えてふれない。

＜成績評価法＞

成績の評価項目は、比重の重い順に、課題エッセイ（6割）、2回の定期テスト（3割）、授業出席率と貢献度（1割）と設定してある。成績評価については様々な試行錯誤を経たが、今日取る方法の大きな特徴は課題エッセイの重視である。

定期テストにおいては、授業で扱った記事は一切使用せず、未読の記事を材料として扱う方針を当初から貫いている。授業教材は、授業におけるその時が命であり、テストのために再利用する方式は取らない。はじめの2年間は、設問プリントのスタイルを反映させた記述式問題を私自身が作問した。しかし、採点基準設定の難しさや、採点に奪われる時間的負担の大きさ等、様々な困難が生じたため、昨年度より完全な客観式テストに切り換えた。記事の内容理解度を問う既成の多肢選択問題を利用している。

ちなみに学生は、辞書持ちこみでテストを受ける。辞書を使いながら文章を読み解くのは、外国語学習においてはごく普通のプロセスである。未読の記事に当たる学生の負担を少しでも軽減させるとともに、「普通のプロセス」を通しての英文把握力を測ることが目的である。

テストを客観式にしたことに伴い、評価においては、課題エッセイの比重を高め、定期テストの比重を軽くした。課題エッセイの評価もまた難しい側面があるが、よくチェックすれば、個々の学生の英語力のみならず、思考力や創造力、さらに、英語に向き合う姿勢が興味深く浮かび上がる。評価することの楽しみを見出せることが、

この方式の大きな利点である。先の「学生による授業アンケート」〔資料1〕参照〕において、2000年度の「課題への取り組み」の項目に高い数値が出ている。これは、課題ノートの比重を増大させたことが一因と考えられる。

2) 「言語パロール説」とコミュニケーションの主体性

多くの人々は、「コミュニケーション」という用語から、いわゆる会話のみを連想し、「読む」「書く」行為を除外して考える傾向が強い⁶⁾。私は「再考 I」において、「読む」「書く」行為が、「話す」「聞く」行為と同様に、歴としたコミュニケーション行為の一環であることを論じた。また、四技能の有機的関連性についても論じ、「読む」「書く」行為が、「話す」「聞く」行為と切り離され、二項対立的な発想で捉えられることの問題性を論じた⁷⁾。その際に、近江誠氏の「言語パロール説」に基づくコミュニケーション理論を援用した⁸⁾。

言語を「各人のその都度の思考過程の表現という『主体的活動』」としてみるのが「パロール」である。パロールは、言語を「人の外側にある客観的規約」あるいは「話者から切り離れた『制度』」としてみる「ラング」の対概念として用いられる。言葉の意味は、あらかじめ定められているのではなく、文を発する人の意図や目的に即してその都度与えられていく、という見方が理論の根本にある⁹⁾。

近江氏は、英語を「読む」コミュニケーションについて、従来の「文法訳読」方式と、近年重視されつつある「直読直解」方式をともに批判する¹⁰⁾。前者は訳すことが目的化し、英文はあたかも文法事項を導入するための内容になっており、後者は大意の把握、情報の獲得のみに意識が奪われ、筋が分かればそれがすべてという姿勢を作り出している、と指摘する。両者に欠けているのは、「英文のかたまりを生きた語りとして味わい読む余裕」である。活字の背後にある書き手の意図を読み取るという、「レトリカル」¹¹⁾な姿勢がそこには見られない。

氏は、「読む」行為とは、一般に考えられているような受身的なものではなく、「読み手が主体の能動的コミュニケーション行為」であるとする¹²⁾。書き手が、目的を持って文章を「書く」のと同様に、読み手も、目的を持ってその文章を「読む」。「読む」行為に入る前段階で、与えられた英文に対して、自分がどういう目的でかわかっていくのかをあらかじめ決めることが必要となる。氏は、「批判的味

読 (Critical and Appreciative Reading)」方式¹³⁾を提唱し、そのエッセンスを次のように解説する。

書き手がいるから、その語り手の心情を自らの体や音声の感覚まで動員して味わう。読み手が自分の目的に従って読みを選択する主体性。その選択後も、書き手の目的達成行為の産物として作品を扱い、その意味や価値を究明していこうとする。しかもその際も読み手である自分の主体性は失われずに、書き手の意図や話す時の息遣いなどに呼応していこうとする¹⁴⁾。

私が「時事英語」において学生に求めるリーディングの姿勢は、まさにこの「批判的味読」に尽きる。「主体性」を失わずに読むことのできる教材の発掘が、それゆえに、「時事英語」では重要な位置を占める。教材の選択に際しては、次項で論じる「時間的社会的性」という概念が大きな鍵になるが、もう一つの鍵は、「内面の啓発」である。〔資料2〕に紹介した記事トピック一覧に明らかなように、私は通常、単に面白おかしいというだけのトピックは選ばない。学生が与えられたテーマに内面から深くかかわり、自らの思考や情緒を活性化しうる内容を備えたトピックの選択を心がける。ちなみに、2001年度後期は、「同時多発テロ事件」、「陰陽師ブーム、夢枕氏の見解」、「イチロー選手の日本人魂」のトピックを終え、次週は「狂牛病汚染、厚生労働省のジレンマ」のトピックを取り上げる予定である。「同時多発テロ事件」の詳しい授業展開については、後で紹介することにする。

私が作成する設問プリント（〔資料3〕参照）や課題エッセイ（〔資料4〕参照）も、学生に「批判的味読」をさらに促すことが意図されている。設問プリントを読めば、その記事内容のポイントがほぼ瞬時にして分かる。内容についての興味をあらかじめ喚起することにより、「読む」行為に入る前段階で、学生は教材に、より主体的なかかわりを築くことができる。設問は、「文を発する人の意図や目的に即して」作することに徹してある。書き手の意図から絶縁した問題はここでは一切作らない。これによって、書き手のメッセージを主体的に把握する、という「読む」コミュニケーションそのものの授業を作り出していく。

課題エッセイは、書き手のメッセージを的確に受信するだけでなく、書き手のメッセージを一個人としてどう受けとめるかを意識さ

せる働きをする。文の受けとめ方は、当然、各個人によって異なる。課題エッセイの存在により、読み手は、書き手のメッセージを主体的に受けとめながら読む姿勢を形成する。書き手の様々なメッセージに共鳴や反発を覚えながら読むプロセスにおいて「批判的味読」は成立する。

従来の「英作文」という名で知られる和文英訳の多くは、日本語を英語に置きかえる機械的訓練に過ぎなかった。言いかえれば、自分の外側に英語の客観的規約を構築しようとする「ラング」に支配されたあり方である。「時事英語」の課題エッセイは、ラング支配からの脱却を学生に促す。言葉はあらかじめ与えられるものではない。自分のメッセージを持つことからコミュニケーションは始まる。書き手が発したメッセージを主体的に受けとめ、その上で、自分自身のメッセージを主体的に伝えようとするプロセスである。そのためには、いかにして自らが思考し、適切な用語を選び、論理を構成し、自らのメッセージを効果的に伝達するかが問われる。これらのプロセス全体が、近江氏の述べる、コミュニケーションとしての「書く」行為に他ならない¹⁵⁾。

私はその「書く」プロセスにおいて、最初は日本語に頼っていいという考えに立つ¹⁶⁾。コミュニケーション相手との対等な感覚を失ってほしくないからである。まず母国語で自己のメッセージを発せられるか、を問う。その後で自己のメッセージを英語に要約させる。日本語で思考したことに英語力がついていかないもどかしさを学生が味わうのは当然であろう。私は、英語学習とは単なる暗記ではない、という認識を学生に植えつけたいと願っている。また同時に、日本語による思考がクリアでない限り、英語で思考を表現することなどではしない、という当たり前の事実にも気づかせたいのである。

いわゆる英語力が低いとされる学生が、記事内容に触発され、ひとたび自分なりの強いメッセージを持った時、荒削りではあるが、説得力ある優れた英文エッセイを仕上げることもある。そんな時私は、世間一般の基準にあてはまる「英語力」という尺度に疑問を抱かざるを得なくなる。

今年度の前期試験時(2001年7月)に私が実施したアンケートから、興味深い数字を紹介したい。まず、使用記事の英語難易度について全般的にどう思うか、を学生に尋ねたところ、全72名中の回答は、

「難しい」が13名 (18%)、「やや難しい」が37名 (51%)、「普通」が22名 (31%) であり、「やや易しい」、「易しい」はいずれも0名であった。すなわち全体の7割近くが、程度の差はあれ、教材を難しいと感じている。確かに、英字新聞や英文雑誌の生の記事は、学生にとってそれほど易しいものではない。板書される少なからぬ外的な答案をみながら、私もしばしばそれを感じさせられる。

しかしながら、ここで注目したいのは、だからと言って、教材レベルを易しくしてほしいと考える学生が多数を占めないという事実である。今後の教材の難易度をどうしてほしいか聞いたところ、「もう少し易しくする」を希望した者が24名 (33%) いたものの、7名の無記入¹⁷⁾を除く残り41名 (57%) がすべて「このままでいい」を選択肢から選んだのである。しかも「難しい」、「やや難しい」を選んだ50名のうち、半数以上の26名 (52%) が「このままでいい」を選んでいる。英語の難しさは、必ずしも学習者の学ぶ意欲をそぐ結果をもたらしてはいない。もちろん、日本語による懇切丁寧な解説を教員が与えることを前提にしているのは言うまでもない。

私たちが留意しなければならないのは、英語、または内容のレベルを下げることは、逆に学習者の主体性をそぐ結果を生み出しかねないという可能性である。ラング依存の外国語教育は、言語が内在化するまでに時間を要する。また、内在化した知識を主体的な言葉の使用に結びつけていくにはさらに時間を要する。それゆえに、学習者の「英語力」レベルに合わせた積み重ね式の教育スタイルが、理に適ったあり方になる。しかしながら、すべての英語学習がラングに支配される時、それは一見効率的な外国語学習に見えるものの、実は、学習者の知的欲求から湧き出るはずの主体性を奪っている側面がないだろうか。

近江氏は、パロールが「学習者の生理に合致している」と述べる。パロールは、言葉を発信者の意図や目的に即したものと捉えるがゆえに、自分のスタンスが分かり、体も心も乗ってくる。その結果として、覚えも早くなるし、主体性を失わずに言葉を使うことが可能になる、と指摘する¹⁸⁾。従来のラング主導の受動的な英語教育を改革する鍵は、「言語パロール説」の深い理解と応用にかかっていると言っても過言ではなからう。

3)「社会的自我論」とコミュニケーションの社会性

ミードの「社会的自我論」は、コミュニケーションの社会性に注目する。コミュニケーションは、他者との外的なコミュニケーションのみならず、内省すること、つまり自己との内的なコミュニケーションによって成立する。人間は様々な他者とかかわりあいながら、この「重層」コミュニケーションを通して自我の社会性を拡大していく¹⁹⁾。私は、「再考Ⅱ」で、いわゆる「コミュニケーション・アプローチ」と呼ばれる英語教授法の限界性を、「時間的社会性」の欠如という観点から論じた²⁰⁾。この項では、教材の「時間的社会性」が、教材の興味深さをいかにひき出すかを論じることに重点を置く。

「時間的社会性」は、「現在」ならびに「リアリティー」という概念に密接にかかわる。ミードは、次の引用が示すとおり、「現在」という時を、過去や未来から切り離した瞬間としては捉えない。

もし世界を、仮構的に考えられた瞬時的な現在に帰してしまうならば、すべての対象は断片となってしまうであろう。……そのような瞬間的現在 (knife-edge present) というものは存在しないのである。いわゆる「見かけ上の現在」(specious present) においてさえ、継起 (succession) があり、過去と未来があるような時間的推移 (passage) というものが存在している。したがって、見かけ上の現在は、行為の観点からすれば、過去と未来の両方が含まれているセクションにはかならないものとなる。この自然の時間的推移を重要視するならば、知覚の対象は行為の現存する未来 (existent future of act) と考えられる。……その未来は未来としては不確実な (contingent) ものである (訳は船津他)²¹⁾。

現在という枠組みを通じて、過去が選択され、未来が再編成される。それゆえに現在は、時間的推移を経ながら刻々と変化し続ける。自我が、他者が、そして社会が同時進行的に変化している時間的空間が「リアリティー」と捉えられる。自我、他者、社会のそれぞれがそれぞれに影響を与えながら変化変容していく性質が「時間的社会性」である。ミードのいう「社会的自我」とは、手短かに言えば、他者や社会に影響を受けながら不断に形成されていく自我であり、それは、自我が他者や社会に不断に影響を与えていく逆のプロセス

をも含む。

この「時間的社会性」こそが、時事英語の教材を選ぶ際に私が最も留意することの一つである。人々は「時間的社会性」のある情報を通常追いつめ求めている。分かりやすく言えば、多くの人々は毎朝、新聞を習慣的に読む。仮に、その日届いた新聞の隣に、未読の前日の新聞が置いてあったとする。人々は、ためらわずに、まずはその日に届いた新聞に手を伸ばして読み始めるであろう。その理由は、そちらにより緊密な「時間的社会性」が詰まっていることが期待できるからである。読者は、絶え間なく変化する現在を把握し、「不確実な」未来を再編成していくために、「新しめの過去」の情報を選択するのが常である。ましてや一ヶ月前の新聞には、目もくれないはずだ。この人間の自然な心理に配慮して、私が選ぶ教材は、基本的に「新しめの過去」の記事であることが多い。

しかしながら、「新しめの過去」が常に最良の情報とは限らないことは自明である。人々は新聞を読む際に、それぞれの記事にどの程度の価値があるかを意識的にせよ無意識的にせよ判断し、読む記事を絶えまなく選択する。読むに値する記事と分かれば、たとえ一ヶ月前、一年前の記事であれ、時間をさかのぼってそれらを真剣に読むことさえある。自己の必要に根ざしているか否か、言いかえれば、自我に変化を与える「時間的社会性」がまだその記事に備わっているか否かがポイントである。私が時として選ぶ記事はそのような「古めの過去」の記事でもある。ただし、多くの学生が共通に興味を抱くような「古めの過去」の情報を新聞や雑誌から見つけ出すのは、それほど容易なわけではない。

ちなみに私はこれまでの「時事英語」の授業を通して、年度をまたいで同じ記事を使用したことは片手で数えるほどしかない。意識的に使わないのではなく、記事の「時間的社会性」を意識することにより、必然的に使えなくなるのである。その時点において、その記事に示す学生の反応がいかに大きかろうとも、その時点を過ぎれば、その記事の「時間的社会性」が失われてしまうのが常である。

2001年度前期の六つの記事トピックについて、〔資料2〕を参照しながら、具体的な解説を追加しておく。これら六つのトピックすべては、教材配布日直前の、または比較的配布日に近い日付の記事から選ばれている。ただし、③のメイン記事であるユニクロ社長のインタビューは、前年度の教材を再使用した。これは、同社長が高額

納税者番付に登場したという新しいニュースにより、その古めの記事が「時間的社会的性」を取り戻したことで、ユニクロ文化が今日の若者に与えている依然として強い影響力を鑑みてのことである。②を除くいずれもが、その時々日本社会において、話題を提供した社会現象ならびに社会的事件である。②は、ちょうど20周忌を迎えるボブ・マーレーの壮烈な生き様がドラマティックな筆致で紹介される記事である。伝説の人物が、このようなきっかけで今に蘇ることもある。

さらに年度を遡り、2000年度の教材についてもコメントしておく。12あるトピックのうち、⑦⑧⑨⑫⑬⑯の六つはタイムラグがほとんどない記事である。⑧の映画評は、ゴールデンウィークの直前授業であることを考慮し娯楽性のある記事を選んだ。また、学生が普段ほとんど興味を示さない傾向にある日本政治のトピック⑫は、参議院議員選挙の直前に、この時とばかりに選んだ。⑩の乙武洋匡氏、⑬の高倉健氏の両メッセージは、そのメッセージ内容の深さ、インパクトの強さから選んだ。また、⑭のシュルツ氏死去のニュースは数ヶ月遅れであったが、味わい深い彼の伝記ストーリーを最初に読み興味を喚起した上で臨んだ。このトピックは、結果として学生から最も大きな反響を得た²²⁾。⑰のような英語教育に関わる論争は、英語英米文学科の学生が大勢を占めるクラスであることを考慮し、毎年度必ず一度は取り上げることにしている²³⁾。⑪⑮も、ややタイムラグがあるが、現代文明の象徴とも言えるコンピューターについてより深く考えさせるきっかけを作った。「コンピューター問題」の授業展開については次項でふれる。

「時事英語」の醍醐味は、「時間的社会的性」をフル活用できるところにある。実り豊かな旬の素材をもぎ取れば、調理法はそれほどこだわらなくともおいしい果実を味わえる。その果実の滋養は、内面の成長を自然と促すであろう。その単純なプロセスこそがナチュラルなコミュニケーションである。設問プリントは、言うなれば、果実の滋養の効果的な摂取を助ける消化剤である。素材を味わい深く読ませ、素材を滋養として自己の内なるコミュニケーションを活性化させ、それを外的コミュニケーションである課題エッセイにつなげる。この一連のサイクルを通して、学生の「英語力」のみならず、「社会的自我」が成長してくれることを私は願うのである。

今年度前期末に行った前出のアンケートで、教材の全般的内容の興味深さを学生に尋ねた。全72名の学生の応答は、「かなり興味深い」が11名（15%）、「興味深い」が44名（61%）、「普通」が13名（18%）、「あまり興味深くない」が2名（3%）、「全く興味深くない」が1名（1%）という内訳になった。すなわち、全体の4分の3以上の学生が、私の選んだ教材に興味深いと感じている。また興味深くないと感じている学生は、わずかに3名（4%）と少ない。この数字は、「時間的社会的性」を備えた素材がいかに大切かを物語るものであろう。

「時事英語」の教科書なるものが存在するというを私は知っている。しかしながら、どんなに最新版の教科書を使おうとも、そこに出ている記事はすでに「ニュース」ではなくなっているのが常である。また、記事選択の自由がないため、自我とのかかわりの薄いトピックが無目的に羅列されていることが多い。

一般の英語教科書においてはさらにその傾向が強くなる。私たちは教科書を評価する時、概して「ラング」に意識を集中させる。つまり、文法・文型の導入のしやすさや、単語や文章のレベルの適切さが、しばしば「よい」教科書の必要十分条件になる。それはそれで重要であることは疑いない。しかしながら、「時間的社会的性」への配慮が往々にして死角になることがある。そのことは結果的に思わぬ落とし穴を生み出すことになりうる。

扱う文章のコンテクストがミードの言う「瞬間的現在」に断片化され、「現存する未来」が断ち切られている時、もはや「パロール」に根ざすコミュニケーション教育は遠のく。インパクトのない古びた素材²⁴⁾をどれほど見事に調理してみても、骨折り損の草臥れ儲けに終わってしまう可能性もある。

今日の英語コミュニケーション教育は、古びた素材に拘泥して、自縄自縛に陥っているケースがないだろうか。過剰な人為に依存して、ナチュラルさを失っているケースがないだろうか。言語は単にスキルとして人為的に処理できない側面がある。「時間的社会的性」のあるトピックに目を見開くことによって、自己の内なるコミュニケーションは活性化する。ミードが主張するように、言葉の獲得は、「社会的自我」の拡大と密接に結びついているはずである。

4) 「コトバの意味づけ論」とコミュニケーションの創造性

コミュニケーションをイコール会話として捉え、会話を「キャッ

チボール」に喩える説明が少なからずある。つまり、人間は「ことば」を投げたり、受けとめたりしながら会話を進める。そして、相手に最も受けとめやすい「ことば」を投げることで、そして、相手から投げられた「ことば」をしっかりと受けとめるやりとりを、理想的会話の条件に帰結させる。このコミュニケーション論は、一定の説得力を持つ。しかしながら、現実のコミュニケーションの実相を的確に捉えているかどうかには疑問符がつく。私は「再考Ⅰ」において、田中茂徳、深谷昌弘両氏が提示する「コトバの意味づけ論」を援用し、そのような「キャッチボール観」では説明しきれない、人間コミュニケーションの創造性について考察した²⁶⁾。

「コトバの意味づけ論」には、コミュニケーション論のコペルニクスの転回がある。端的に言えば、このモデルは、人間コミュニケーションの本質を「コミュニケーション・ギャップ」として捉える。「キャッチボール観」においては理想の対極にしか位置づけられなかったコミュニケーション・ギャップを、コミュニケーションの原動力であり、さらには「思いつきを生む創造性の源泉」であると肯定視するのである²⁶⁾。

「コトバの意味づけ論」のエッセンスは、人間コミュニケーションの多様性と不可知性への配慮である。言葉の多義性、変容性、個人差に着目した上で、言葉の意味は無限の広がりを持ち、個人により暫定的にその都度意味づけられるもの、と捉える。解釈の多様性ゆえに、コミュニケーション行為者間で、メッセージの意味の同一性は確保されない。会話の成立は、受信者と発信者の双方が、相手の「情況」²⁷⁾を付度しながら、会話を成立させようとする志向性にある、と分析する。

深谷氏はこのモデルを、社会における「創造的合意の形成」という生産的機能につなげていく方途を拓く。社会に現存する「強い対立」を解決に導くためには、次のプロセスが必要であると主張する。

創造的合意の形成は、お互いの尊重すべきところを採り入れながら、互いにとって魅力ある合意案を思いつき練り上げる協働作業である。単に会話を楽しめばよいという場合以上に、他者情況の付度に心をくだく必要がある。それだけではなく、自らの思考の枠組みや思考内容を構成する諸概念をしなやかに再編成する謙虚で柔軟な心構えもいる。コミュニケーションに対す

るこうした協力的姿勢・態度がなければ「強い対立」を克服するような創造的合意の形成はむずかしい。……ただひたすら相手を否定し自己主張に終始するようでは、議論に勝利することはあっても納得はえられない²⁸⁾。

私は、人間コミュニケーションの真の醍醐味はこのような「協働作業」的プロセスにあると考える。それは、ただ会話を楽しく理解しあえばいいという発想とは異なる。私は「時事英語」において、学生にそのような醍醐味を感じさせる機会を時として提供することを試みてきた。「再考Ⅱ」の中で、私は「男女平等問題」をトピックにした際の「時事英語」の授業実践(1999年度)を紹介した²⁹⁾。二つの真っ向から対立する意見を提示し、学生一人一人にまずは意見を書かせる。それらの意見を学生にフィードバックした上で、再び学生の意見を問い直す。そのプロセスにおいて、少なからぬ学生が、深谷氏の言う「創造的合意の形成」に直結するような発想を提供してくれたことが私の頭に印象深く残っている。

昨年度(2000年度)は、前項でふれた「コンピューター問題」のトピックを扱った際に、興味深い展開があった(〔資料2〕⑪⑮参照)。まず、6月の授業でビル・ゲーツ氏のインタビュー記事を取り上げ、コンピューター社会の未来に限りない信頼を置く氏の哲学を読み取らせ、「あなたはビル・ゲーツ氏の考え方に賛成するか」というエッセイを書かせた。その結果、8割を上回る学生は、「全面的に賛成」か「どちらかというと賛成」のポジションを選び、ゲーツ氏の進歩主義思想を鵜呑みにするエッセイが大半を占めた。

私は、この結果に少なからぬ驚きを覚え、10月の授業でもう一度、「コンピューター問題」の記事を取り上げることにした。今度はコンピューター社会の落とし穴を論じる記事である。前回学生が提出したエッセイから抜き出した賛成派、反対派の意見をプリント上に紹介して学生にフィードバックし、私自身もここでゲーツ氏が主張する哲学の矛盾を私なりに指摘した。その上でもう一度エッセイを書かせたところ、多くの学生が自らの思考の枠組みを再編成していることが分かった。今度は、半数を上回る学生が、ゲーツ氏の思想に対して反対派のポジションについた。ゲーツ氏に「全面的に賛成」を選んだ学生は、17%から3%に、「どちらかというと賛成」は68%から41%に減少していた。

ここではもう一つの実践例として、今年度（2001年度）の後期授業で真っ先にとりあげた「同時多発テロ事件」のトピックを扱った際の授業を取り上げる。「強い対立」といえば、人類の歴史を振り返っても、今回の対立ほど強い対立はそうざらにあるわけではない。この対立を解決に導くためのコミュニケーションが、一介の英語授業の中でなされたなどと言うつもりは毛頭ない。私が学生に認識させたかったのは、その「強い対立」それ自体の存在であり、その対立の解決のためには、途方もない量のコミュニケーションが必要とされるであろうという冷厳な現実である。

今回の、同時多発テロ事件は、アメリカ合衆国対アルカイダという当事者同士の対立をはじめとして、全世界を巻き込む様々な「強い対立」を生み出している。私は、米軍のタリバン攻撃をめぐる日本国内にある意見の対立に着目した。The Asahi Shimbun（英文）は、9月15日付の社説³⁰の中で、日本が米軍事攻撃を支援することには慎重さが求められる、と述べる。暴力に対し暴力で応えることは、国際社会におけるアメリカの指導力を低下させるだけであり、日本の役割は、報復することの愚かさを、友人としてアメリカに説き伏せることである、と主張する。一方、The Daily Yomiuriは、9月17日付の社説³¹の中で、日本が積極的に米軍事攻撃を支援することの重要性を述べる。テロが見遇ごされたら国際社会の秩序と平和がなくなる。湾岸戦争時の苦い経験を教訓にして、日本は単なる協力以上の主体的役割を果たすことが必要である、と主張する。

私は、このように真っ向から対立する社説二つを教材に選び、①日本の果たすべき役割、②日本がアメリカに協力する際に取りるべき姿勢、③1990年の湾岸戦争についての見方、④アメリカの軍事報復に対する見解、についてそれぞれの社説がどう論じているかをまずは読み取らせた。

そして最後の15分程を使って、学生に対して、自分はどちらの社説に近い考えを持つかというエッセイを日本語で書かせた。その際、Asahiに「全面的賛成」はAA、「どちらかという賛成」はA、Yomiuriに対しては同様にYY、およびY、そして、「どちらともいえない」という中立派にはNというポジションの記号をつけさせた。翌週、私はその数値分布とそれぞれの派の主要意見を紹介するプリントを配布した。ちなみに数値分布は、提出者数60名中、AA7名（12%）、A27名（45%）、YY0名（0%）、Y12名（20%）、N14名

(23%)という内訳になり、Asahi派(AAおよびA)が57%と過半数を占め、Yomiuri派(YYおよびY)の20%を圧倒した。

私は、揺さぶりをかけることにした。次に私が選んだ記事は、The Washington Postの“The Case for Force”と題する9月30日付の社説³²⁾である。この社説の内容は、全面的に米軍事攻撃を支持するものである。平和主義者たちの論点を一つ一つとりあげ、それらについて悉く否定するスタイルで主張がなされている。「力の行使」に信念を抱くアメリカ人の気質がみなぎる内容である。

たまたまであるが、この日はアメリカ国務省に15年勤務したキャリアを持つアメリカ人の知人が大学を訪れており、彼に授業に参加してもらい、その記事に対する感想を語ってもらった。彼は、アメリカ代表紙の社説が、これほど全面的に現政権の政策を支持することに幾分の驚きを感じながらも、基本的にその記事内容を支持した。そして、学生に問いかけた。「やるべきでない、と言うのは簡単である。それならば、あなた自身その代わりに何をするのか」と。ちなみに3人の学生が、この時、果敢に手を挙げて、自分の意見を述べ、予期せぬコミュニケーションの発展をみた。

最終的なエッセイ課題は、「AsahiとYomiuriの社説、およびプリント上の学生の意見、さらにWashington Postの社説、授業中交わされた議論など、すべてを吟味した上で、あなたの考えを日本語600字程度で述べ、それを英語に要約しなさい」というものである。すでに私の手元には、その課題が提出されている。今回もまた、ポジションを記してもらったところ、現時点での提出者数61名のうち、前回のポジションを維持した者は23名に過ぎないことがわかった。ちなみに、A派からY派に移行した者が8名、その逆が3名いた。またNのポジションをA派に移行させた者が6名、Y派に移行させた者が2名、その反対にA派をNに移行させた者が4名、Y派をNに移行させた者が7名いた。またAをAAに4名、YをYYに2名いた。個々のエッセイをよく読めば、ポジションを維持している者でも、大方は思考内容を少なからず変化させていることが分かった。

私が「時事英語」において重きを置くのは、ある問題についての答えを導き出すことではなく、考えるための材料と刺激を与えることである。人間はコミュニケーションにより上述のごとく思考を変化させる。人間は、他者の考えに影響を受けながら、自分の考えを変化させ、その変化がまた他者の考えに影響を与えていくと述べる

ミードの「社会的自我論」が、このようにして授業の中で具現化する。このプロセスは、多人数クラスの持ち味にもなる。学生は、様々な他者の考えの中に自らの考えを置くことにより、人間社会の複雑性を知るだろう。そして、自分の考えは決して絶対的なものではないことに気づいていくであろう。

自分の考えを相手に理解させるためには、ましては、社会にある「強い対立」を解決に導くためには、多数の人々の骨身を削るような「協働作業」が必要となる。それはコミュニケーションという名の「創造的合意の形成」を実現するプロセスである。人間社会に存在するのは理解しあえる心地よいコミュニケーションばかりではない。一筋縄ではいかないコミュニケーションがあるという当たり前の事実を知らしめることも重要なコミュニケーション学習の一環にちがいない。

5) 結びに代えて

私は、学生の「英語力」を一元的に点数評価することにあまり積極的になれない。その場合の基準は、勢い、学習者の技能的側面に傾くのが常である。私はそのあり方を全面否定するものではない。しかし、学習者も人間であるという事実を忘れてはなるまい。自らの思考とは切り離された「英語力」が○×式に測られ、序列化され続けることにどのくらいの間が耐えられるものか。本稿で論じた人間の「主体性」、「社会性」、「創造性」は、機械では測ることのできない人間の人間たる特質である。これらの人間の特質を軽視、または無視することは、一面では、学習指導上の効率性の向上をもたらすかもしれない。しかしながら、もしそのあり方が行き過ぎた時、いわゆる「人間疎外」現象をも同時に生み出しかねない危険を孕んでいる。

私が「時事英語」の授業を通して願うことは、学生の「英語力」の向上にも増して、英語に向き合う姿勢そのものを健全化することにある。英語を使う、というコミュニケーション行為の本質は何か。また、そもそも何のために英語を学ぶのか。これらについて、学生に多少なりとも考えるきっかけを与えることができれば、それだけでこの授業の目標の半分以上が達成されたと考える。

最初の年度の「時事英語」の教壇に初めて立った時、100人近く集まった学生を前に幾分怖気をふるい、20人ほどに、抽選を経て退出

してもらった。それでも、70人を越える学生を相手に英語授業が成り立つものか不安に覚えたものである。しかしながら、回を重ねるにつれて、そのようなクラスでも熱意を失うことなく英語が教えられるということが分かってきた。こうしたクラスを扱うには、近江氏の言う「学習者の生理に合致している」教え方がどうしても必要になる。そして、その教え方の発見は、私にとってそれほど困難なことではなかった。

私は、自分が英語を勉強してきたように、学生たちに英語を教えたのである。「時事英語」の授業は、私が大学時代に出会った作家の小田実氏による英語授業³³⁾に多大なインスピレーションを受けている。自分の興味あるトピックを見つけ、そのトピックを通して英語を学んでいくことの重要性を氏はしばしば主張しそれを授業で示してくれた。興味あるトピックが見つけれないのなら、英語を学ぶ資格はない、というのが氏の持論であった。それ以来私は、自らが心底興味を抱けるトピックの探求に徹しながら英語と向きあってきた。そしてそれが私にとって、ほとんど唯一の生理に合致する英語勉強法であった。そのプロセスは今日に至るまでも不断に続いている。「時事英語」の教材選択もまた、紛れもなくそのプロセスの一環にあった。

私が4年に渡る「時事英語」の授業実践を通して得た最大の発見は、興味と思考を装着して言語を使うというプロセスそのものが人間コミュニケーションの根本に位置づけられる、という単純な道理である。コミュニケーション教育と言うと、必ずしも思考を伴わないスキルの訓練に目を奪われてしまう向きがある。しかし、コミュニケーションの本質は、ただ単に流暢に会話をするという表面的な行為を指すのではない。私が「再考Ⅰ」、「再考Ⅱ」、そして本稿に取り上げてきた「言語パロール説」、「社会的自我論」、「コトバの意味づけ論」のいずれもは、人間が人間でなければできないコミュニケーションの深いメカニズムを浮き彫りにする。それらは、「人間の顔をした」あり方に、ともすれば逆行しかねない今日の英語コミュニケーション教育そのものに再考を促している。

最後に、アンケートに記された「時事英語」に対する学生の声のいくつかを〔資料5〕に紹介する。毎年度、少なからぬ学生が授業を通して私が発したメッセージを主体的に受けとめてくれた。それが何よりの授業成果であると受けとめている。

〔資料1〕「学生による授業アンケート」結果一覧（1998年度～2000年度）

*5段階評価に基づく5点満点で算出（ ）内は、学内全講義平均の数値

年度	1998年度	1999年度	2000年度
回答者数／登録者数	63／76	91／127	86／105
アンケート回収率	83%	72%	82%
授業態度	出席状況	4.3 (4.2)	4.3 (4.3)
	予習への取り組み	3.2 (3.2)	3.0 (3.2)
	理解への努力	4.1 (4.2)	3.9 (4.3)
	復習への取り組み	3.0 (3.1)	2.8 (3.1)
	課題への取り組み	4.1 (4.1)	4.3 (4.1)
	[授業態度]項目の平均値	3.7 (3.7)	3.7 (3.8)
授業内容	シラバス	3.7 (3.7)	3.7 (3.8)
	内容の理解しやすさ	4.0 (4.0)	4.1 (4.1)
	創意工夫	4.2 (3.9)	4.4 (4.0)
	刺激と興味	4.2 (4.0)	4.3 (4.1)
	内容への満足	4.1 (4.0)	4.1 (4.1)
	[授業内容]項目の平均値	4.1 (3.9)	4.1 (4.0)
担当教員	熱意	4.7 (4.4)	4.7 (4.5)
	授業参加への促し	4.1 (4.1)	4.3 (4.2)
	時間配分	4.0 (4.0)	4.2 (4.1)
	話し方	4.5 (4.1)	4.3 (4.2)
	補助手段(プリント等)	4.4 (4.0)	4.5 (4.5)
	[担当教員]項目の平均値	4.3 (4.1)	4.4 (4.2)

〔資料2〕記事トピックとその出典一覧（2001年度前期、2000年度）

*（ ）内は教材配布日

2001年度前期

- ① 「えひめ丸ワドル艦長、CNNインタビュー番組に生出演」(5月11日)。
Wm. Penn, "Televiews: Waddle Saves Face on 'Larry King Live'." *The Daily Yomiuri*, May 3, 2001. / "CNN Larry King Live: Scott Waddle Tells His Side of the Story." Aired April 26, 2001. [Transcripts:インターネットによる入手]
- ② 「20周忌を迎えるレゲエ歌手ボブ・マーレーの生涯」(5月18日)。Paul Murrau, "It's Been a Long Long Time ...— Friday Marks the 20th Anniversary of Bob Marley's Death." *The Daily Yomiuri*, May 10, 2001.
- ③ 「ユニクロ社長柳井氏、高額納税者番付に登場」(5月24日)。「Uniqlo Boss Yanai Joins Ranks of Richest Japanese." *The Daily Yomiuri*, May 17, 2001. / "They Dare Not Be Different." *Newsweek*, November 13, 2000.
- ④ 「出会い系サイトの危険」(6月1日)。「Virtual Encounters Have Dark Side." [Editorial] *The Daily Yomiuri*, May 18, 2001.
- ⑤ 「トルシエ監督、決勝戦欠場の中田選手を痛烈批判」(6月15日)

Jeremy Walker, "Troussier: 'Nakata Has Let the Nation Down'." *The Daily Yomiuri*, June 12, 2001.

- ⑥ 「田中真紀子新外務大臣フィーバーの分析」(6月22日) Keiko Watanabe, "Tanaka Stirs Controversy as Doting Public Looks On." *The Daily Yomiuri*, June 9, 2001.

2000年度

- ⑦ 「中田選手、A S ローマ移籍後の苦悩」(4月24日)。Jeremy Walker, "Gaucci 'Worried' for Nakata." *The Daily Yomiuri*, March 31, 2000.
- ⑧ 「映画『アメリカン・ビューティー』評」(5月1日)。Isabel Raynolds, "'American Beauty' Has International Appeal." *The Daily Yomiuri*, April 27, 2000.
- ⑨ 「ゴールデンウィーク只中、17歳の凶行」(5月8日)。“Cops: Bus Hijacking Premeditated.” *The Daily Yomiuri*, May 7, 2000. / “17-year-old Suspect Said Strong-willed and Clever.” *The Daily Yomiuri*, May 7, 2000.
- ⑩ 「乙武洋匡氏のメッセージ」(5月15日)。Isabel Raynolds, "Best-selling Author Aims at Wider Audience." *The Daily Yomiuri*, March 18, 2000.
- ⑪ 「ビル・ゲーツ氏インタビュー、コンピューター社会への信頼」(5月22日)。“Bill Gates Interface: Is Rapid Social Change a Problem?” *The Daily Yomiuri*, June 22, 1999. / “Bill Gates Interface: Will Technology Ever Slow Down?” *The Daily Yomiuri*, August 31, 1999.
- ⑫ 「総選挙直前、各党首のメッセージ」(6月6日)。“Party Leaders State Key Issues of Campaign.” *The Daily Yomiuri*, June 3, 2000. / “Mori Dissolves Lower House - Election Campaign Set to Start on June 13 for June 25 Vote.” *The Daily Yomiuri*, June 6, 2000.
- ⑬ 「シドニーオリンピック、日本人選手たちの活躍」(9月25日)。Jeremy Walker, "Tamura Strikes Judo Gold At Last." *The Daily Yomiuri*, September 19, 2000. / Jeremy Walker, "Shinohara Settles for Silver." *The Daily Yomiuri*, September 23, 2000. / Jeremy Walker, "Takahashi Runs to Marathon Gold." *The Daily Yomiuri*, September 25, 2000.
- ⑭ 「スヌーピー生みの親シュルツ氏死去、彼の生涯」(10月1日)。Paul Aurandt, "Sparky Was a Loser." *Destiny and 102 Other Real Life Mysteries*, Bantam Books, 1983. / Michael Kahn, "'Peanuts' Cartoonist Shulz Dies of Heart Attack." [Reuters] *The New York Times*, February 13, 2000.
- ⑮ 「コンピューター社会の落とし穴」(10月22日)。David Kalish, "With Progress Come the Perils of Technology." [Associated Press] *The Daily Yomiuri*, December 28, 1999.

- ⑯ 「ユニクロ社長柳井氏インタビュー、ユニクロブームの秘密」(11月13日) “They Dare Not Be Different.” *Newsweek*, November 13, 2000.
- ⑰ 「小学校英語教育導入の是非」(11月20日) “Students Should Start Study of English Early, Panel Says.” [Kyodo] *The Asahi Evening News*, June 26, 2000. / “Readers’ Forum: What are Your Views on a Proposal to Offer English Lessons at Public Primary Schools?” *The Daily Yomiuri*, October 30, 1999.
- ⑱ 「高倉健、10代若者への渾身のメッセージ」(1月15日) Ken Takakura, “Be a Man of Perseverance.—A Letter to Teenagers” *The Daily Yomiuri*, November 3, 2000.

〔資料3〕設問プリント問題一覧(2001年度前期)

＊〔資料2〕の記事トピック番号に対応

- ① 1. “... it marked his transition from news bite to a real-life person.”とあるが、どのような点で、“a real-life person”であったのか。2. インタビューを大方見事にこなした前艦長であったが、筆者によれば一つだけ責められるべき箇所があったという。それは何か。3. キングの前艦長に対する姿勢はどうだったか。4. キングが前艦長をほめた理由と、それに対する前艦長の反応。5. 筆者は、キングが冒頭でブッシュ大統領のコメントを取り上げ前艦長をたたえたことに対してどう感じたか。6. “Fortunately”とあるが、なにが「幸運」なのか。
- ② 1. ボブ・マーレーは自分の音楽に対して、どのような信念を抱いていたか。2. 彼はステージでどんなメッセージを聴衆に伝えたか。3. 彼の音楽の歌詞があらゆる人々の心に残るのはなぜか。4. 彼のレゲエ音楽に対する功績はどんなことか。5. 彼の社会的良心や慈悲深さは何によって形づくられたか。6. 彼の伝説をさらに増大させた出来事とは。7. 彼のアルバム“Exodus”はどのようにして誕生したか。8. 彼のガンとの壮絶な戦いについてまとめよ。9. 彼の短い命が証明したことは。また、“Don’t bury your thoughts, put your vision to reality.”を日本語にせよ。
- ③ 1. ユニクロは「GAP」のクローンではない、と氏は述べる。どこがどうちがうのか。2. 昔と今の、人々の服の買い方のちがいは何か。3. 海外進出先としてロンドンをまず選んだ理由は。4. ロンドンで、ユニクロが受け入れられると考える根拠は何か。5. 氏の「ファッション」についての考え方。6. 日本人はより多様になっているという意見について、氏はどう考えているか。

- ④ 1. 25歳の男性が犯した犯罪の内容をまとめよ。2. この事件を通して、私たちはどのような点に気をつけるべきだと述べているか。3. 出会い系サイトの増加ぶりについて、どのように説明しているか。4. ネット社会の特徴について、どのように説明しているか。5. 出会い系サイトが若者に人気をよぶ理由の一つとしてあげられていることは。6. バーチャルな世界が現実の世界に比べて、危険が大きい理由が三つ上がっている。それぞれを簡潔にまとめよ。7. “It is regrettable that people who are ignorant of this are encouraged to commit crimes.”とあるが、この“this”の内容をまとめよ。
- ⑤ 1. トルシエ監督は、決勝に中田が出場せずにフランスに敗れたことについて、“I am disappointed.”と2ヶ所で述べている。それぞれの理由をまとめよ。2. トルシエ監督は、中田がイタリアに帰った理由をどのようにとらえているか。そして彼の選択について、どのような判断をくだしているか。3. トルシエ監督は、今回のコンフェデレーションカップは日本にとって大きな意義のある大会だったと考えている。どのような点でか。4. トルシエ監督は、日本チームのキャプテンについて、どのような方針をもっているか。5. トルシエ監督は、森岡についてどのような評価をもっているか。
- ⑥ 1. 田中外相に対する批判の内容、および批判の出所の特徴をまとめよ。2. 田中フィーバーにより、日本のメディアに、かつてなかった二つの現象が述べられている。それらを説明せよ。3. 女性セブン副編集長が語る田中外相の「おばさんの魅力」をまとめよ。4. 外相が田中角栄の娘であることが人気にどうつながっていると藤田氏は見るか。5. 外務省役人が述べる彼女への不満と要望についてまとめよ。6. 自由党の達増氏は、外相の説明矛盾を批判した。その結果、何が起こったか。7. 達増氏は、国民が田中氏を応援する理由をどのようにとらえているか。8. 評論家の吉永氏は、不景気が沈滞する日本において、立ち回りのうまい政治家が人々の心をつかむとみる。しかし、そこにはどんな問題が潜むと指摘しているか。

〔資料4〕課題エッセイ一覧（2001年度前期）

・〔資料2〕の記事トピック番号に対応

- ① あなたは、ワドル元艦長を英雄視するアメリカのメディアのあり方についてどう考えるか。
- ② あなたは、ボブ・マーレーの生き方、また短い人生の中に残したメッセージから何を学んだか。

- ③ 柳井社長はさらに食品産業への進出をねらっている。あなたは、これらを含めた氏の考え方や戦略についてどう思うか。
- ④ 出会い系ネットの危険への対処策として、あなたならどんなことが大切であると考えているか。
- ⑤ あなたは決勝戦を欠場した中田選手の選択についてどう考えるか。
- ⑥ あなたは田中真紀子新外務大臣を支持するか。それとも支持しないか。その理由を述べよ。

〔資料5〕「時事英語」に対する学生の感想の抜粋（1998年度～2001年度）

*各年度末（2001年度は前期末）に独自実施の授業アンケートより

1998年度

英語は言語ということではなく、もっと厚みを持つものであることがわかった。／自分の興味ある授業だったので楽しんで受けることができた。／学校の図書館で英字新聞を読むようになり興味が持てた。／英語の学習法や人間性について学べたことがためになってよかった。／新聞記事を読んで、言葉が文化を通じて変化していることを知った。／使った教材のほとんどが面白く、英語を読むということがそれほど苦痛に感じなかったし、興味を持てた。／自分の問題意識のなさを痛感した。これからもっと情報を得、それについて深く考える習慣をつけたい。／今までの英語学習は和訳中心であったが、この授業で違う勉強法があることが分かった。／先生のコメントが新鮮でためになった。文化や社会の知識は文章理解の手助けになる。／ただ辞書を引いてひたすらやる勉強でなく楽しみながらできた勉強でよかった。／時事英語はただ英単語が分かればできるのでなく、社会を知らなければ理解が難しいことを知った。／英語を勉強したいわけではなく、英語を使いたいことを思い出した。

1999年度

その時考えていることをやっていたので、社会について考えることができた。／普段意外と自分の意見を書く機会が少ないことに気づかされた。／英字新聞だけでなく、日本の新聞ももっと読まなければと実感した。／時事英語は日常必要な英語の割に難しく感じた。しかし楽しさも知ることができた。／僕の英語の考え方や見方を変えてくれた。先生の言葉一つ一つに重みがあり、感動や納得しまくっていた。／この授業から刺激を受け、十分に興味を持つことができた。／批判的な目を持って、文章や記事（英語に限らず）を読むことを学んだ。／日頃、時事問題に触れることは少なかったが、この授業を受けることで、新聞も政治経済欄を見るようになったのでよかった。／国際問題というのは、解決が非常に困難で、いろんなことが混じりあ

って根深いものであることを知った。／英語を通して何かを得る、ということ、これからの自分に役立ちそう。英語は得意じゃないけれど、今後も英語を自分の日常生活にとり入れていきたい。また簡単にそれができることがわかった。／自分がどんな姿勢で英語学習に臨めばいいのか、真剣に考えるきっかけになった毎時間の先生の提言だった。

2000年度

考えるということ、そして意見を持つことは大切だと改めて学んだ。／今までの私の英語の勉強のやり方がいかにまずかったか分かったような気がする。／自分なりに考え、まとめる勉強ができた。そして英語を学べた。／自分の英語への取り組み方自体を考えるいい機会になった。／毎日この授業のやり方で英語を勉強したいと思った。本当に能率のいい勉強法だった。／英字新聞が英語を読む練習になると同時に、英語で社会の情報を得ると言う方法、面白くていいなと思った。／この授業にとりあげられたことに対して、いろいろと考えることができた。／今まであまり考えなかった話題に触れることができて、ためになった。／生きた英語の奥深さが分かった。／英語を学ぶのはあまり難しくないものだとうかった。自分の好きなものを読むのが一番よいということ。／いかに私たちが興味を持って勉強できるかを真剣に考えている、というのが題材選びから伝わってきた。／英語は興味あることだと勉強しやすいと思った。／普段学べない、生きた英語が身についた。／興味ある題材はやっていて楽しい。／英語の本当の学び方を理解できた。／記事の選択が世相を切っていて秀逸だった。／現代の社会現象や問題など幅広い分野にわたる内容で興味が持てた。この授業を受けなければ決して知れないことを知れた。／「時事英語」という名前の通り、その時々話題を選んで作る教材がとてもよかった。

2001年度前期

生の英語を感じられるのがよかった。／他の授業と全く違う。／身近な話題だと面白いし読みやすくなる。単語を覚える量もぜんぜん違うと思う。／英字新聞などとても私には読めないと思っていたが、辞書を使えば何とかすることがわかった。／これまでで一番興味を持てた授業だった。／田中真紀子さんの記事によって政治に関心が持てた。／今起きていることを読んだので、興味深く読めた。／日本の新聞では知れないことを知れ、いろいろな情報を得ることができ、大変興味深かった。／自分もそういうトピックを見つけれられたと思う。自分の興味あるものを読むというのはとてもよいことだと思う。／興味のある内容の時には、単語の意味も頭に入っている。／英字新聞の読み方以外にも、社会問題、様々な人の生き方なども学べとても楽しく勉強になった。／視野が広がっていく、そんな感じがする。

註

- 1) 拙稿「コミュニケーション論再考－人間の顔をしたコミュニケーション教育に向けて－」『敬和学園大学研究紀要』第9号、2000年。
- 2) 拙稿「コミュニケーション論再考Ⅱ－G・H・ミードの「創発的内省性」を基軸にして－」『敬和学園大学研究紀要』第10号、2001年。
- 3) 「時事英語」の授業は国際文化学科の学生も自由選択科目として受講可能であるが、過去4年間の登録者数は計5名と少ない。
- 4) 1999年度卒業生（英語英米文学科）は総数113名（留年5名を含む）のうち87名（77%）が「時事英語」に登録し、うち81名（93%）が単位取得した。また2000年度は、総数123名（留年6名を含む）のうち102名（83%）が登録し、うち91名（89%）が単位取得した。
- 5) 再履修者が今年度3名いるがその数は登録者の人数に含まない。
- 6) 拙稿、2000年、179－182頁参照（多くの学生が「コミュニケーション能力」を「会話能力」と同一視している傾向を指摘している）。
- 7) 拙稿、2000年、184－186頁参照。
- 8) 拙稿、2000年、186－188頁参照。「言語パロール説」に基づく英語コミュニケーション論についての説明は、近江誠『英語コミュニケーションの理論と実際－スピーチ学からの提言』研究社出版、1996年、1－106頁参照。
- 9) 「パロール」と「ラング」の説明については、近江誠、前掲書、90－93頁参照。
- 10) 近江、前掲書、48－49頁参照。
- 11) 近江氏は、「レトリック」を「コミュニケーション目的を達成するために取ることが可能な手段」と定義し、「メッセージの発信者と受信者との間に、言語ならびに/あるいは非言語を使って展開される目的達成行為」が「レトリカル」なコミュニケーションである、と解説している（近江、前掲書、39頁）。
- 12) 「英語を読むコミュニケーション」（「レトリカル・リーディング」）の説明については、近江、前掲書、48－63頁参照。
- 13) 「批判的味読」の説明については近江、前掲書、53頁、ならびに拙稿、2000年、187頁参照。
- 14) 近江、前掲書、53頁。
- 15) 「英語を書くコミュニケーション」（「レトリカル・ライティング」）の説明については、近江、前掲書、65－70頁、ならびに拙稿、2000年、187－188頁参照。
- 16) 拙稿、2001年、222－223頁参照（日本語を利用して学生にエッセイを

- 書かせることの意義を、別の角度から述べている)。
- 17) 無記入は、回答者がアンケート項目を見落としたことによると考えられる。
 - 18) 近江、前掲書、97頁。
 - 19) 拙稿、2001年、213-217頁参照。「社会的自我論」の説明については、G.H. Mead, *Mind, Self, Society; From the Standpoint of Social Behaviorist*, ed. by C. W. Morris, University of Chicago Press, 1934、ならびに、船津衛「ジョージ・H・ミード-社会的自我論の展開-」東信堂、2000年参照。
 - 20) 拙稿、2001年、216頁参照。
 - 21) Mead, "The Genesis of the Self and Social Control," 1924-1925, in *Selected Writings [of] George Herbert Mead*, ed. by Andrew J. Reck, University of Chicago Press, 1964, p289 (邦訳 船津衛他編訳「自我の発生と社会的コントロール」【社会的自我】恒生社厚生閣、1991年、67-68頁)。
 - 22) 2000年度末に実施した独自アンケートで、印象に残ったトピックを二つあげてもらったところ、回答者84名中44名(52%)が⑭(「シュルツ」)を選んだ。2位は⑰(「英語教育」)で17名(20%)、3位は⑩(「乙武」)と⑪(「ビル・ゲーツ」)が同数で15名(18%)であった。2001年度のトピックについては、2001年度前期末実施のアンケートにおいて同様の質問をしたところ、回答者72名中の1位は②(「ボブ・マーレー」)で27名(38%)、2位は⑤(「トルシエ監督」)の23名(32%)、3位は①(「ワドル艦長」)の19名(26%)という結果が出た。
 - 23) 1998年度は「英語帝国主義」(Ginko Kobayashi, "Maintaining Identity in English Classroom." *The Daily Yomiuri*, October 26, 1998)、1999年度は「実践的コミュニケーション能力」(Mikiko Miyakawa, "English as a Global Communication Tool." *The Daily Yomiuri*, October 18, 1999)をトピックに取り上げた。後者については、拙稿、2000年、179-182頁参照。
 - 24) いわゆる「古典」に属する名著がこれと無関係であることは言うまでもない。古典は、調理し甲斐に満ちているが調理人の腕がこれほど試される素材もない。
 - 25) 拙稿、2000年、189-191頁参照。「コトバの意味づけ論」の説明については、田中茂徳「日常言語における意味」、深谷昌弘「創造的コミュニケーションとガバナンス問題」関口一郎編「現代コミュニケーション1」大修館書店、1999年、151-225頁参照。
 - 26) 深谷、前掲書、219頁参照。
 - 27) 「コトバの意味づけ論」においては、「状況」と「情況」は区別される。前者は「自己およびその周囲で時間軸に沿ってたんと推移するモ

ノ・コトの集合」で、後者は「意味づけられることによって意味を帯びた状況」と定義されている（深谷、前掲書、200頁）。

- 28) 深谷、前掲書、220-221頁。
- 29) 拙稿、2001年、220-223頁参照。
- 30) “Japan Should Not Recklessly Support U.S. Military Reprisals,” [Editorial] *The Asahi Shimbun*, September 15, 2001.
- 31) “Japan Role Vital in Antiterrorist Battle,” [Editorial] *The Daily Yomiuri*, September 17, 2001.
- 32) “The Case for Force,” [Editorial] *The Washington Post*, September 30, 2001.
- 33) 作家・小田実氏は、1950年代から30年近くに渡り予備校の英語教師を務めた経験を有する。フルブライト留学生としてのアメリカ留学やアジア・アフリカ作家会議等の幅広い経験を基に、独自の英語教育哲学を培い、極めてユニークな英語教育を実践した。氏の英語教育哲学および実践は、『小田実の英語50歩100歩-自まえの英語をどうつくるか』（河合文化教育研究所、1989）に詳しい。